

大気・電離層の異常と東日本大震災

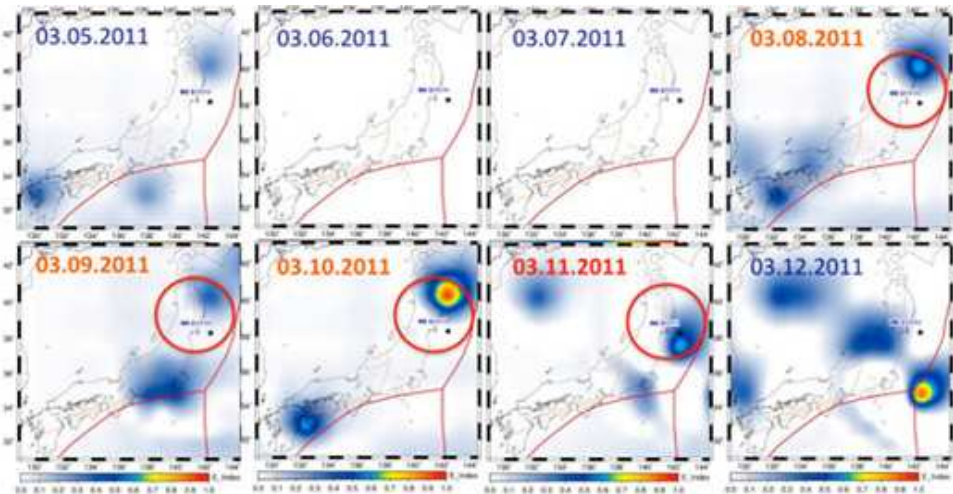
～ 地震数時間前に大量のラドン放出による大気の温度上昇確認 ～

今回の号は、実はかなり以前に作成し発行しないままになっていたものだ。なぜ、今頃、発行するのかといえば、最近、インターネットの中で11月前半から12月にかけて大規模な地震発生の可能性を警告する情報が流れているからだ。それらの情報の中には信頼できるサイトもある。いざという場合の備えとして地震関連にかかわる情報を紹介する。まずはアメリカの研究チームによるニュースより。3月11日の東日本大震災前に観測衛星が、震央付近一帯に大気に赤外線の高い上昇を確認したとのこと。この赤外線は近くから放出されるラドンの影響によるとのこと。直近の地震の予知に役立つ可能性がある。～以下、ニュースより～

NASA ゴダード宇宙飛行センター (GSFC) の研究チームが東日本大震災の数日前から震央 (震源地) の海上での電磁気活動の観測結果を発表した。

観測によると、電離層における電子の量が劇的に増加、また震央における大気昇温を示す赤外放射の急増も見られたようだ。「地図-大気圏-電離圏-磁気圏結合」という現象として研究されているとのこと。地震直前に大規模なストレスによって大量のラドンガスが放出され、この放出による放射線は大気をイオン化するとのこと、これがさらに他の現象を連鎖して引き起こすとのこと。

大気がイオン化すると、例えば水はイオンに引き寄せられるため、大規模な水の凝縮を引き起こし、この反応によって放出される熱が赤外線放射として観測されるという。このため、ラドンの放出は赤外線放射を衛星から分析することで検知できるようだ。



研究チームによると、大震災直前に震源地を中心として電離圏での電子容量が増加しているのが確認されたとのこと。また震源地域からは赤外線が放射され、その放射は地震数時間前に最大値を記録しているという。赤外線の放射はこの時に大気が熱せられていたことも意味しているとのことだ。なお、動物の地震予知能力にはこのラドン放出が関わっているという考え方もあるようだ。

昔から「地震前には動物たちが騒ぎ出す」と言われていた。今回の巨大津波の場合もそうだったが、「言い伝え」や「迷信」に対して科学の証明は常に後追いである。科学はある種の真実を追究する学問だが、科学的でないことと真実は別次元の問題だ。東電や保安院に、過去の大地震にまつわる言い伝えを謙虚に聞く姿勢があれば、こんな事態にはならなかった。それだけではない。日本に原発など作ること自体、無謀だったことがわかる。

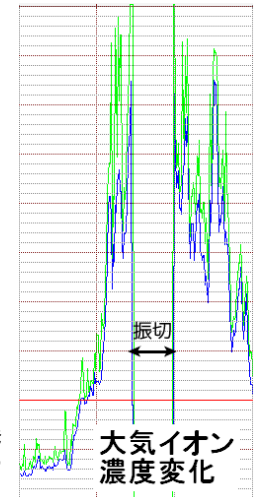
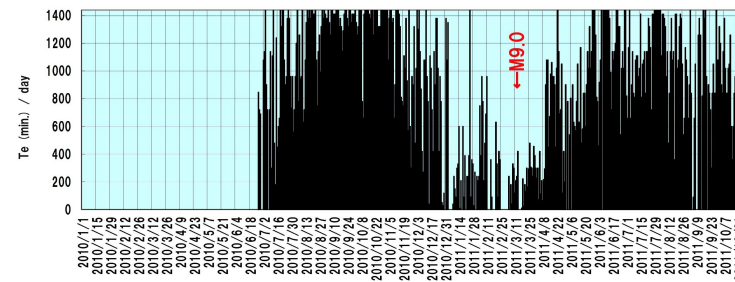
再びマグニチュード9の地震が発生する可能性

～ 北海道大学理学研究院附属地震火山研究観測センター 森谷武男氏の個人的見解 ～

地震の予知は現代科学をもってしてもなかなかむずかしい。しかし、研究は確実にすすんでいる。御用学者より、個人レベルでの独創的研究成果で3.11の地震を予期していた方もいた。北海道の火山研究観測センターは有珠山の噴火を事前に予知し、住民を完全に避難させて死傷者0という成果を挙げ一躍有名になった。その森田研究員が地震エコーの観測データから12月～01月にかけて巨大地震の可能性を指摘している。内外への影響が大きいことから、「個人的見解」との注釈をつけている。～ 以下、抜粋 ～

- VHF 電磁波の地震エコー観測からふたたびM9地震が発生する可能性が高まっている。
- 2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震の前に8か月ほどさかのぼる2010年6月27日からえりも観測点において89.9MHzのチャンネルに地震エコーが観測され始める。
- この地震エコーは8ヶ月続き、2011年1月には弱くなりついに3月09日のM7.3の前震が発生
- その後M9.0が発生。M7.3が前震であることは、これに続く余震群のb値が0.5程度で極端に小さいことで判明。
- 図は2010年01月01日からの地震エコーの日別継続時間。横軸は2010年01月01日からの月日、縦軸は1日毎の地震エコーの継続時間(分)
- M9.0の発生後、地震エコーの活動は弱かった。
- いわきの地震M7.0が発生したところから再び活性化。昨年後半に観測された状況と良く似た経過をたどっている。
- もしもこのまま3月11日の地震の前と同じ経過をたどるとすれば、再びM9クラスの地震が発生すると推定される。
- 震央は東北地方南部沖から関東地方沖の日本海溝南部付近。
- 震源メカニズムが正断層である場合には海底地殻上下変動が大きいので津波の振幅が大きく巨大津波になる可能性。
- 発生時期は12月から2012年01月にかけて。地震エコーの衰弱からだけではピンポイントでの予想は難しい。

ERM-89.9MHz Jan. 01, 2010. ~ Oct. 26, 2011



専門用語が多いので理解するのがややむずかしいが、ざっくりと説明すると、

3月11日の巨大地震の前の10ヶ月前から地震エコーと呼ばれる電波が観測されはじめ、観測数が次第に増加。その後、回数が減少しほぼ0に近くなった3月11日に巨大地震発生。その後、同じような地震エコーが観測されはじめ3.11の地震発生と似たパターンをたどっている。このままいけば同規模の地震が発生する可能性があるというものだ。

今回の東日本大震災は太平洋プレートが広範囲にわたってずれた地震だった。日本付近は3つのプレートがせめぎあっているため、力のバランスが崩れ東海・南海地域の巨大地震発生確率が一段と高くなったといわれている。昔から大きな地震の前には自然や人体、機器等に異常な現象がみられることが知られている。これらを「宏観異常現象」という。

大気イオン地震予測研究会の観測によれば長野・松本測定点で10月下旬以降、測定可能限界である50,000(個/cc)を超える非常に大きな大気イオン濃度異常を頻繁に記録しているようだ。右図のグラフ。自然の声を謙虚に聞くためにこそ科学は存在したいものだ。コンピュータシミュレーションによる「ストレステスト」で原発再稼働の判断を決めるのだそうだ。しかし、自然が発している声は「それは止めておけ。近いうちに地震がくるぞ」である。

11月11日……スポーツ新聞で関東地方の地震の可能性を記事にしていた。何事もないことを願って終わりにしたい。